

京都大学	博士（文学）	氏名	平出 貴大
論文題目	宗教の根源への問い — 前期・中期パウル・ティリッヒの宗教哲学的思索 —		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、20世紀を代表する神学者の一人であるパウル・ティリッヒ（1886-1965）の「宗教の根源への問い」をめぐる宗教哲学的思索を主題とし、とりわけ1920年代から30年代までの宗教思想を解明することを目的とする。ティリッヒの宗教思想の背後にある一貫した問題意識と課題は、キリスト教のメッセージがもはや伝統的な表現形式において受け取ることができないということ、またそれゆえに、現代的状況に相応しい新たな表現形式において語り直されねばならないということである。もっとも、このような問題意識は同時代の他の神学者たち（カール・バルト、ルドルフ・ブルトマンなど）にも共有されるものであり、実際に宗教（キリスト教）の側からその伝統と現代との間の分断された溝を埋める様々な試みがなされてきた。しかし、そのような試みの中でティリッヒの立場がとりわけ際立っているのは、宗教の根源へと迫ろうとする宗教哲学的・神学的な思索においてである。ティリッヒは、神学者として単に伝統的な宗教的な語りを繰り返すのではなく、そのような語りの根源、つまりそのような語りが生じてくるところの体験そのものへと遡求することによって、その宗教的体験（＝啓示の出来事）を宗教哲学的に究明し、そこから再びその「語り」を振り返ることでそれを有意味に語り直そうとする。宗教の成立根拠とその生成過程を問うところにティリッヒの宗教哲学的思索の特徴がある。宗教が「そこ」から生じてくるの「もと」とは何か、それは人間の本質とどのように関係しているのか、この問題をティリッヒはどのように考えているか、これが本研究を導く根本的な関心である。</p> <p>序論では、本研究の問題設定と研究史における位置づけがなされ、本研究が取り組む課題として次の2点が明確化される。（1）1920年代における「宗教の根源への問い」の主題化と啓示論。「宗教の根源への問い」をめぐる宗教哲学的思索は、1920年代に構築される「宗教哲学」とその宗教哲学的な基礎において議論された「啓示論」において主題化されている。それゆえ、宗教の根源が究明される場としてティリッヒの啓示論を解明することが第1の課題である。啓示論の解明を通して、キリスト教的な世界解釈のための「神－世界－人間」という形而上学的枠組みや、神と人間（世界）との関係性における「啓示－信仰」という図式が整理され、ティリッヒの宗教思想の基礎が提示されることが期待される。（2）体系形成とその基礎理論の移行・変化。1920年代という時代はティリッヒの体系形成の移行期（思惟の理論的枠組みの変化）と重なっており、ティリッヒ研究においては重要な時期とみなされている。1920年代の思想は、1925年を境に前半と後半に区別され、前半においてはドイツ古典哲学と現象学の影響を受けた意味論（超越論哲学）が展開され、後半（本研究では1930年</p>			

代前半までの展開を追跡する)においては哲学的人間学と実存哲学の影響を受けた存在論(存在論的人間学)が展開され、それぞれティリッヒの宗教思想の基礎理論として機能している。1920年代に生じるこの基礎理論の移行・変化を説明することが第2の課題である。以上から本研究は全体として相互に関連する二つの課題を有している。当初ティリッヒの啓示理解は意味論的な枠組みにおいて規定されたが、後に存在論的な枠組みにおいても(厳密には存在論と神学との接点として)、内容上、継続される。啓示論の解明は意味論から存在論へと跨るティリッヒの宗教思想の基本的構図を明らかにすることに寄与する。一つ目の課題の遂行を通して、つまり宗教の根源を啓示の問題として解明することによって、二つの基礎理論において事柄として共有されている「宗教的体験」の構造が見出され、その共通の場から二つの体系構想の基礎理論のそれぞれの有効性の検証が試みられる。本研究における二つの課題の遂行は、主に1919~1935年という限定された時期のティリッヒの思想を分析することにおいてなされる。本研究の特色として挙げられるのは、既存の主要著作の研究を前提としつつ、これまで未公開であった講義録の分析を研究の中心にしている点である。本研究では、特に1925~27年になされた教義学講義(第2章~第4章)とアメリカ亡命後初期(1934/35)になされた人間学講義(第6章・第7章)が詳細に扱われている。

本論の各章の概要は以下の通りである。第1章では前期ティリッヒの問題意識を把握し、特に宗教哲学の方法論的基礎(意味論)が解明される。ティリッヒによると啓示の本質論の規定は宗教哲学に依拠しており、この点からこの第1章は第2章以降における啓示論の分析への導入として必要な準備作業である。第2章と第3章はともに「啓示=突破」(「啓示は無制約的なものの制約されたものへの突破である」というテーゼ)の分析にあてられている。しかし、第2章と第3章は「突破」概念へのアプローチ方法が異なる。第2章では突破概念の「一般的考察」、つまり突破概念の諸相(由来・形成過程と射程・意図)の分析がなされる。また同時に、この突破概念に基づいて同時代の神学潮流におけるティリッヒの位置付けを明確化することが試みられる。ここで使用されるアプローチの特徴は、1920年代の諸著作における突破概念の実際の使用例を分析することによって、「突破概念の意味の分類」(クレイトンの研究に依拠)を行うというものである。だが、使用例の分類という方法は確かに概念を整理することは可能であるが、その概念のもつ意味を十分に明らかにできない可能性が指摘されうる。そこで、第3章ではこの観点から突破概念への別のアプローチ、即ち「啓示」という語の本質に基づくアプローチが試みられる。「啓示」概念は本来「覆いを取り去る」「隠れたものが明らかになる」という意味であり、この理解からティリッヒの突破概念を把握することが検討される。この手法によって、ティリッヒの啓示理解には「覆いを取り去る」ということ(超自然的啓示=突破)と「覆い隠される」ということ(自然的啓示=凝固)の相互性において動的プロセスがあることが解

明される。そして、このことによって第2章でなされた分析の理論的根拠が示されることになる。第4章では、第3章までが啓示の出来事（＝突破）に焦点があったのに対して、「啓示の出来事」とその「語り」の関係性に注意が向けられる。ティリッヒにとって、形而上学とは「無制約的なものを志向し、それを象徴によって表現しようとする宗教的営み」とされる。この章では「神について語ること」の困難と可能性が主題化され、神についての「間接的語り（＝象徴）」とその語り（ドグマ）の共同体形成的機能が論じられる。最終的に「啓示の出来事」と「その語り」についてのこれまでの議論（第2章～第4章）は、「体験・表現・了解」という「経験と言語表現」についてのより普遍的な構造連関（この点について八木誠一と上田閑照の宗教哲学が参照される）において整理され、ティリッヒの形而上学思想のもつ意義が宗教哲学的な文脈において分析される。第5章は本研究の主題にとって重要な章である。ティリッヒは『教義学講義』のある箇所で「啓示＝突破」概念を二つのレベルに分けている。それは根本啓示と救済啓示であるが、両者は抽象的な区別にすぎず、現実において両者は一つであるとされる。ティリッヒによると根本啓示は「無制約的なものが端的に突破すること」であり、救済啓示はそれに対して「無制約的なものが特定の道において突破すること」である。ここでの区別は「特定の道」即ち「具体的内容」（語り）の有無である。つまり、ティリッヒは突破それ自体、即ち「突破の瞬間」については「内容に関して無差別である」としており、それゆえ根本啓示こそがあらゆる具体的な啓示の始まり（＝宗教の根源）を示しているということである。この章では、先行研究に依拠しつつ根本啓示の概念を分析することを通じて、ティリッヒの宗教思想の中に一貫して現れる二重構造（自己/世界、非象徴的な直接的把握/象徴的な間接的把握、確実性/懐疑）（根本啓示/救済啓示 → 絶対的信仰/具体的信仰 → 神を超える神/象徴表現としての神）、並びに徹底的な実存的懐疑（否定性）において転換として生じる宗教性（肯定性）が解明され、最終的には、徹底した懐疑が宗教の否定ではなく、逆説的に啓示の突破（＝宗教の誕生）へと通じるというティリッヒの特徴的な思想が明らかとなる。第6章と第7章では、啓示の出来事についての「語りの内容（語られたもの）」の解明（キリスト教的象徴の解釈学）が試みられ、そのために中期ティリッヒの人間存在論の構想（『亡命初期講義』）の読解がなされる。ティリッヒは人間の有限性の分析（不安と絶望）によってキリスト教の教理の解釈を行っており、「異質性」、「不確実性（気がかり）」、「死の必然性（憂鬱）」という人間の不安（偶然性）や「全体性からの分離」という人間の絶望（罪）を、キリスト教の基本的な教理である「創造」「摂理」「永遠の生」「救済」という象徴概念と対応させている。この場合、キリスト教信仰とその内容は、人間の不安や絶望（実存的問い）を乗り越えようとする勇気の表現（答え）として捉えられる。この最後の二つの章を通じて、ティリッヒのキリスト教教理の解釈方法（問いと答えの「相関の方

法」とそれを支える理論的基礎（存在論的人間学）が解明され、亡命初期の体系構想の全体像が明らかとなる。

以上から導かれる結論は（二つの課題に対応して）次の2点にまとめられる。

（1）宗教の成立根拠と生成過程の究明として、啓示の出来事の構造連関（体験・表現・了解）を「構造的・形式的な側面」（第2章～第4章の成果）と「内容的な側面」（第6章・第7章の成果）という相互に補完し合う観点から考察した点において、1920年代から30年代までのティリッヒの宗教哲学的思索を評価することができる。「啓示＝突破」は、懷疑者から信仰者への転換の構造を示している（第5章の成果）と言えるが、（転換以前の）「懷疑者（問うもの）の実存的究明」という方向性と（転換後の）「信仰者（答えを受けたもの）の経験の反省的自己理解（回顧）＝神学」という方向性は、信仰へと至った一人の実存の探究者の歩みの全体を示すものである。ティリッヒは「宗教の根源への問い」において、宗教の生成現場を「生の意味を真剣に問う懷疑者」に見出し、その構造を「啓示＝突破」の出来事における「揺り動かし → 方向転換」として規定した。その構造は、存在論的な問題設定において「存在論的衝撃 → 非存在（無）への不安 → その根拠としての実存の絶望的状况 → 存在への勇氣 → 伝統的な象徴の意味解釈（新たな表現の創造）」として内容的に補完される仕方で深められた。（2）（a）意味論から存在論への展開は、その思想の展開を読み解く基準を「方法」にではなく、その方法によって解明される「事柄」に置くなれば、「宗教と文化」の問題系から「人間存在論と神学」の問題系への展開として考えることができる。その場合、「宗教」の二重の弁証、つまり広義の宗教（＝「人間精神の深みの次元としての宗教」）と狭義の宗教（＝具体的歴史的宗教としてのキリスト教）の弁証が遂行されている。前者は、有意味な文化行為（世界形成）の背後に無制約的な意味への隠れた信仰を見出すことによって、人間精神における宗教性を明らかにしており、後者は、人間を「自らの存在の意味を問う存在者」として探究することによって、キリスト教信仰の内容を人間存在の実存的問いへの答えとして明らかにしている。前者についての議論は『宗教哲学』（1925）においてなされ、後者についての議論は『教義学講義』（1925-27）において主題化され、その方法論的な確立が『亡命初期講義』（1934-35）においてなされた。（b）意味論と存在論は、体系構成が並行的に重なる。意味論の二つのヴァージョン（肯定面と否定面＝世界性Aと世界性B）は、人間存在論における普遍的人間学（自由論）と神学的人間学（有限論）に対応している。両者の肯定面について、意味遂行としての文化行為（意味論）は人間の自由による世界構築（普遍的人間学）と並行関係にあり、両者の否定面について、無意味性の深淵への沈み込み（意味論）は人間の有限性における不安と絶望（神学的人間学）と並行関係にある。さらに、ティリッヒはこの意味論と存在論の否定面を義認論（懷疑者）の考察によって深めている。

(論文審査の結果の要旨)

国家社会主義の台頭によってアメリカへ亡命（1933）したドイツの神学者パウル・ティリッヒ（1886-1965）は、その独自の神学および宗教哲学思想において、西欧世界だけでなく日本やアジアにおいても大きな影響力を持った人物である。19世紀以降に人間理性の合理主義的精神のもとでキリスト教を捉えようとした自由主義神学がその影響力を保持し、これに対抗して20世紀に台頭してきた弁証法神学が人間存在の限界性を掲げて神の絶対的な超越性を説く中で、ティリッヒは双方の問題点を指摘しつつ「新しい道」を模索し続けてきた。それは、神学と宗教哲学の双方に根差した思索として展開され、彼のこのような立場は、哲学が問いを發し、神学がその答えを提示するという「相関の方法」に明確に表れている。この考え方が明確なかたちをとったのは彼の思想の後期になるとされているが、その萌芽は前期にまで遡るとされており、近年、彼の未公刊の資料の發見やその分析が進みつつある中で、ティリッヒ思想の体系的な発展を再検討することが研究史上の課題となっている。

本論文は、上述の様な研究状況を背景として、ティリッヒ思想の前期から中期にかけての体系形成の移行や変化を、彼の「宗教の根源」の探究を主軸として分析を試みるものである。ティリッヒの思想は、ドイツから亡命するまでの時期を前期（～1933）、アメリカへの亡命から第二次世界大戦の終結までを中期（～1945）、それ以後を後期（～1965）と、大きく三つの時期に区分される。さらに、前期は1925年までを前期の前半、1926年から1933年までを前期の後半として区別され、前期の前半から中期に入った直後までにあたる1920年代から1930年代までのティリッヒにおける思想的変化および特に中期思想の意義については、研究史においても十分な分析がこれまで行われていなかったと言える。この理由として、ドイツからアメリカへの亡命直後の混乱した状況や、この時期の資料が後代にまとめられた著作集の中でも十分にアクセス可能では無かったことが挙げられるが、他方で、体系的に完成された彼の後期思想やその淵源としての前期思想と比較して、中期の思想には独自の意義が見出しにくく、そのために軽視される傾向があったことなどが指摘される。平出氏は、これまで顧みられることの少なかったこの時期の資料を再検討するとともに、ティリッヒ思想のすべての時期を通底して問題とされる「宗教の根源」の探究の解明を課題として設定し、この課題が前期から中期にかけてどのような体系変化の中で扱われているかを考察している。

ここで問題とされる「宗教の根源」の探究とは、特定の宗教に限定されない、宗教そのものの成立根拠を問うものであって、ティリッヒにおいてそれは「啓示」の議論と関わっている。啓示とは、神のような無制約的なものが、我々のような世界や時間において制約的なものへと「突破」することであると定義されるが、この突破によって人間存在はそれまでの有限なものに留まる在り方をやめ、無制約的なものへと向き直り、これが神と人間との関係性の回復であるとともに、宗教の根源に関わるとされ

るのである。ここでの啓示の突破において、神を単なる思惟の対象と見なすのではなく、人間存在の揺り動かすと神への方向転換という動的な関係性を見る点に、ティリッヒの独自の視点が現れている。尚、ティリッヒは、このような啓示理解を、前期の前半においては意味論を中心に思索しているが、前期の後半から中期にかけては存在論において議論を展開している。即ち、歴史や文化などによって制約されたものである世界が、無制約的なものである神を常に覆い隠そうとする中で、啓示はその覆いを取り去るという在り方をするが、それをどのように把握し、宗教的な象徴を通じてどのように語りうるかに着目する意味論的な体系は、1920年代半ば辺りを境として、自己自身を客観視しつつ自己を変革する自由を持つが故にその有限性を認識し、不安や絶望において無制約的なものを希求する人間存在論的な体系へと議論が移行していくのである。平出氏は、後者の存在論的な議論が、前期の後半において「懐疑」に関わる文脈の中で出て来た後、中期のティリッヒの講義録の中で明確なかたちで展開されていることを指摘し、また、この講義録の中においてのみ見られる過去・現在・未来に対する不安と、それに対する創造・摂理・永遠の生というキリスト教の教理的な対応関係が、後期思想には見られない中期独自の視点であることを突き止めている。このように、講義録に散見される幾つかの議論は、この中期において実験的に用いられた試行錯誤であり、この一部が後期に取捨選択されて引き継がれるとともに、精緻な議論として完成されていくのであり、その思想史的な変化を辿るためにも、平出論文における中期の講義録の分析は大きな意義を持つと言える。

本論文は、従来のティリッヒ研究の世界的な状況を独自の観点で整理し、その特徴を丁寧に捉えるとともにその問題点も明らかにしており、それらを踏まえて問題設定や方法論を導き出している。ティリッヒのテキストは、特に前期から中期にかけて抽象的で、また複雑な議論を展開しているが、それらを読み解くために複数の補助線を引きながら独自の分析を行っている。他方で、議論を明確化しようとするあまり、幾つかのテキストにおいて本来扱うべきであった箇所を十分に考察しきれなかった部分などもあり、今後の課題と見なすべき点も散見される。しかし、こうした問題点は本論文の意義を著しく損なうものではなく、今後の研鑽において克服することが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年1月19日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。